

## 日本語・イタリア語対照研究

—物の周辺・先端部を指す名詞を中心として—

古 浦 敏 生

### §1 はじめに

物の周辺・先端部を指す基本的な名詞の対照研究としては、日本語と英語に関するものではあるが、(國廣 1981)が提示した第1表<sup>1)</sup>が参考になる。

第1表

point	end	サキ
edge		ハシ
	brim	フチ ヘリ
	blade	ハ

ここでは、日本語の「サキ」は英語の「end」と「point」に、日本語の「ハシ」は英語の「end」と「edge」に、日本語の「フチ」と「ヘリ」は英語の「brim」と「edge」に、日本語の「ハ」は英語の「blade」と「edge」に、それぞれ対応する名詞であることが示されている。そして、“この図でまず目に付くのは「end」が「サキ」と「ハシ」に対応していることである”、“「end」は棒状の物にも、自動車や長椅子のような棒状とは言えないものについても用いられるが、「サキ」は棒状ないし細長い形のものでないと用いられない”、“「edge」・「brim」に対応する「フチ」・「ヘリ」はかなり近い意味を持っている。「フチ」は紙・布・机・浴槽・茶碗・眼鏡・(つばのある)帽子など平面を持った物体について用いられ、物の外縁に沿った狭い平面部分を指す”、“(「フチ」も)「ヘリ」もほぼ似た用法を持っているが、同じではない。「プールのヘリに寝ころんで日光浴をする」とは言えるが、この文で「ヘリ」の代わりに「フチ」を使うことはできない。「プールのフチ」はせいぜい立っていることができるぐらいの狭い平面を指す。したがって、「ヘリ」の方が「フチ」より広い、物の外縁に沿った帯状の平面部分を指すことになる”などの、興味深いコメントが付してある。

### §2 方法論

イタリア語におけるこの種の名詞に関する対照研究は、未だ見当たらないように思われる<sup>2)</sup>。そこで、本稿では、第1表に登場する「サキ」・「ハシ」・「フチ」・「ヘリ」のほか、使用頻度の高い「カド」・「スミ」も検討してみよう。なお、「ハ」は「ハシ」の語末音消失形と考え、「ハシ」に含めておくこととする。また、「ハジ」は、(新村 1981)<sup>3)</sup>によれば「ハシ」の訛りであるとされているので、これも「ハシ」に含めておくこととする。このほか、(金田・1982)も参考にした。

(國廣 1984)<sup>4)</sup>では第1表では扱われていない「カド」と「スミ」を一まとめとして、次いで「フチ」と「ヘリ」を一まとめとした記述となっている。そこで、本稿では、①「カド」と「スミ」、②「フチ」と「ヘリ」、次いで、③「サキ」と「ハシ」の順に記述分析していきたいと思う。

「角」は「カド」とも「スミ」とも読めるので、日本語テキストにルビが付してある場合のみ、検討の対象とする。用例ではルビ表記は省略する。

テキストとしては、イタリア語訳の存在する日本文学作品8種を用いた。テキストとその略号、並びに、イタリア語訳に関しては、論文末を参照されたい。なお、それぞれの用例には( )内にテキストの略号と出現ページ数を記した。また、周辺・先端部を指す名詞には下線をほどこした。

### §3 「カド」と「スミ」

- カド わがいる部屋つづきの棟の角(『草枕』36) l'angolo del tetto dell'edificio in cui si trova la mia camera (伊訳 41)
- カド 小豆色の四角な石が、ちらりと角を見せる(『草枕』103) appare l'angolo di una pietra quadrata color rosso fagiolo (伊訳 117)
- カド 濃き水の折れ曲がる角(『草枕』132) angolo sull'acqua profonda (伊訳 145)
- カド 十字になった町のかど(『銀河鉄道の夜』199) all'angolo di un incrocio (伊訳 50)
- カド 町かどを曲がるとき(『銀河鉄道の夜』199) Al momento di girare l'angolo (伊訳 51)
- カド ところがその十字になった町かど(『銀河鉄道の夜』259) Ma all'angolo dell'incrocio (伊訳 50)
- スミ 台所の隅(『華岡青洲の妻』70) in un angolo di quella stanza (伊訳 66)
- スミ (青洲は)部屋の隅に寝かしてある猫のところへ坐り直した(『華岡青洲の妻』94) si sedette accanto al gatto che dormiva in un angolo della camera (伊訳 113)
- スミ (江口は)ハンカチをまるめて部屋の隅に投げた(『眠れる美女』93) appallottolò il fazzoletto e lo gettò in un angolo (伊訳 93)
- スミ 机の片隅に(『古都』33) in un angolo del tavolo (伊訳 23)
- スミ 土間の隅に片寄せてある白の上に(『草枕』19) in un angolo del pavimento di terra battuta, su una macina (伊訳 21)

スミ (花毛氈の)四隅に(『草枕』 97) ai quattro angoli (伊訳 111)

スミ 庭の四隅に設けられた篝火(『愛の渴き』 191) i falò ai quattro angoli del giardino (伊訳 103)

スミ 校庭の隅(『銀河鉄道の夜』 189) un angolo del giardino della scuola (伊訳 42)

スミ (ジョバンニは……)電燈のたくさんついた壁の隅の所へしゃがみ込むと(『銀河鉄道の夜』 190) Giovanni si spostò in un angolo più illuminato della stanza (伊訳 43)

スミ 部屋のすみ(『キッチン』 34) negli angoli delle stanze (伊訳 23)

スミ 頭の片すみ(『キッチン』 58) in un angolo della mente (伊訳 36)

以上、抽出された「カド」6例、「スミ」11例は、いずれも「angolo」と対応している。なお、「Aのカド」・「Bのスミ」という表現におけるA・Bに入る名詞を、「対象物」と命名し、列記しておく。したがって、この対応は第2表のように表わされる。

第2表

日本語	イタリア語	対象物
カド	angolo	棟、四角な石、折れ曲がる水、町
スミ		台所、部屋、机、土間、花毛氈、庭、校庭、壁、頭

(國廣 1984)<sup>5)</sup>によれば、“カドは、「外側から見た二本の線またはいくつかの面が角度をなして接する部分」ということになる。そういう部分は「とがって突き出したところ」である”、そして、“スミは、「物の中心的部分から遠く離れた場所」である”。“スミはいわば「内側から見たカドのある場所」である”とある。

ここで、サッカーのコーナーキックの場合を考えてみよう。ボールは「コーナー(角)」に置かれる。この「角」は「カド」とも「スミ」とも読めるのであるが、ピッチの外側から蹴り込むキッカーにとっては、このコーナーはとがった先端なので、「カド」ということになる。したがって、「角キック」は「カドキック」であって、「スミキック」ではない。しかし、ピッチの中でボールを待ち受ける選手たちにとっては、「コーナー(角)」は内側から見る「カド」のある場所なので「スミ」ということになる。但し、キッカーが蹴り込むのは常にピッチの外側からなので、「スミキック」はあり得ない。イタリア語ではコーナーキックのことを calcio d'angolo という。

次に、野球の試合の「スミ 1 (スミいち)」の場合を考えてみよう。Wikipediaによれば、“スミ 1とは、野球において、1回表または1回裏に1点が入り、そのまま1-0で試合が終了した得点経過のこと。スコアボードの隅に1点が記録されていることから、巷間スミ1と言われる”とある。この「スミ 1」が「カド 1」とならないのは、スコアボードの外側からではなく、内側から得点を見ているからである。

要するに、とがって突き出したところを外側から見るか、内側から見るか、その視点の差に注目する日本語と、そういった視点に無頓着なイタリア語とが明確に区別される<sup>6)</sup>。

§4 「フチ」と「ヘリ」

- フチ (猫は縁のふちへきてゆらっと傾いだ(『華岡青洲の妻』106) arrivato al bordo della veranda, si è inclinato (伊訳 126)
- フチ 湯は常でも槽の縁を綺麗に越している(『草枕』89) (l'acqua calda)……oltrepassa sempre piacevolmente i bordi della vasca (伊訳 100)
- フチ 余は湯槽のふちに仰向の頭を支えて(『草枕』90) con la testa riversa sul bordo della vasca (伊訳 101)
- フチ 毛布の縁(『愛の渇き』48) i lembi della coperta (伊訳 42)
- フチ 崖っふち(『キッチン』94) verso l'orlo di un precipizio (伊訳 58)
- ヘリ 笹縁のついた小さな手巾(『愛の渇き』191) fazzoletto dagli orli ricamati (伊訳 156)
- ヘリ 変色した畳の黒い縁は破れたまま(『金閣寺』267) le stuoie scolorate avevano le nere bordure lacere (伊訳 203)
- ヘリ すると、1階と2階の間にある飾り屋根のへりがぐんと近く見えた(『キッチン』150) da lì l'orlo del tetto decolativo che stava tra pianterreno e primo piano sembrava molto più vicino (伊訳 88)

以上、抽出された「フチ」5例(「ブチ」「ブチ」も加える)、「ヘリ」3例(「ベリ」も加える)の対応は、第3表 & 第4表のように表わされる。

第3表

日本語	イタリア語	対象物
フチ	bordo	縁側、湯槽
	lembo	毛布
	orlo	崖

第4表

日本語	イタリア語	対象物
ヘリ	bordura	畳
	orlo	飾り屋根、手巾

§5 「サキ」と「ハシ」

- サキ 妙なもので、江口は赤い指先きが口をつけるにはきたなく感じた(『眠れる美女』39) Stranamente, a Eguchi ripugnava mettere la bocca sulla punta rossa delle dita (伊訳 41)
- サキ 娘の毛先きはぱちぱちと電気を放って老人の指に伝わった(『眠れる美女』39) Le punte dei capelli della ragazza mandarono elettricità che si trasmise alle dita del vecchio (伊訳 41)

- サキ (江口老人は……)足で娘の足さきをさぐった(『眠れる美女』46) *il vecchio Eguchi… con un piede cercò la punta dei piedi di lei* (伊訳 48)
- サキ もみじの枝さきは、ないような風にゆれ動いている(『眠れる美女』81) *E le punte dei rami degli aceri oscillavano a una brezza impercettibile* (伊訳 83)
- サキ それはそれは細い枝のさきまで、白うなることが、おすさかい(『古都』239-240) anche *l'estremità dei rami più sottili si imbiancano* (伊訳 154)
- サキ 彼は箸の先を舐めながら(『金閣寺』118) *Ripulì con le labbra le punte dei bastoncini* (伊訳 92)
- ハシ (青洲は)右と左の紐の端を一度ひねって(『華岡青洲の妻』148) *girando un'estremità del laccio* (伊訳 164)
- ハシ (娘は)顔はやはり江口の方に向け、右手で枕のはしを軽く抱いて……(『眠れる美女』47) *Poi voltò il viso verso Eguchi, con la mano destra abbracciò l'estremità del guanciale* (伊訳 48-49)
- ハシ 女は薄い唇のはしに皮肉な笑いを浮かべて……(『眠れる美女』74) *Un sorriso ironico affiorò agli angoli delle labbra sottili di lei* (伊訳 76)
- ハシ 千重子は帯のはしを、少しひろげるなり(『古都』102) *Chieko rovesciò appena un lembo del rotolo* (伊訳 67)
- ハシ 坐りの悪い角石の端(『草枕』9) *un lato di un'instabile e spigolosa pietra* (伊訳 7)
- ハシ 本堂の端から端まで(『草枕』138) *da un lato all'altro del tempio* (伊訳 150)
- ハシ そして話すにつれて、馬のように白い唾の泡が、口の両はじに溜まった(『愛の渴き』17) *quando parlava indugiavano sugli angoli della bocca bianche, spmose gocce di saliva, quasi fosse un cavallo* (伊訳 16)
- ハシ (鳥が)華麗な翼のはじを垣間見せているようでもあった(『金閣寺』65) *lasciandomi intravedere soltanto le estremità delle sue ali coloritissime* (伊訳 52)
- ハシ 彼は目のはじでちらと私のほうを見た(『金閣寺』256) *Mi guardò con la coda dell'occhio* (伊訳 194)
- ハシ 山の端(ハ)には、いかめしい夏雲が聳えている(『金閣寺』58) *Cumuli di nubi sovrastavano le cime dei monti* (伊訳 47)
- ハシ 崖のはじ(『銀河鉄道の夜』245) *l'orlo del precipizio* (伊訳 87)

以上、抽出された「サキ」6例、「ハシ」11例の対応は、第5表 & 第6表のように表わされる。

第5表

日本語	イタリア語	対象物
サキ	<i>estremità</i>	枝
	<i>punta</i>	指、毛、足、枝、箸

第6表

日本語	イタリア語	対象物
ハシ	angolo	唇、口
	cima	山
	coda	目
	estremità	紐、枕、翼
	lato	角石、本堂
	lembo	帯
	orlo	崖

第5表において、同じ対象物「枝」が、一方では「estremità」と、他方では「punta」と対応している。用例を再検討すると、「estremità」は「細い枝」が、「punta」は「もみじの枝」が対象物となっているので、前者のほうがよりとがっているような感じがする。しかし、第6表において、「estremità」は「枕」をも対象物としているので、「estremità」のほうが「punta」よりも先端のとがり具合が甚だしいとは言えないように思われる。

#### §6 日伊両言語双方から見た物の周辺・先端部を指す名詞

ここで、6種の日本語名詞(「カド」・「スミ」・「フチ」・「ヘリ」・「サキ」・「ハシ」)と10種のイタリア語名詞(「angolo」・「bordo」・「bordura」・「cima」・「coda」・「estremità」・「lato」・「lembo」・「orlo」・「punta」)との全体的な対応関係を示しているのが第7表である。表中の数値は用例数である。たとえば、「ヘリ」は「bordura」・「orlo」と2種の名詞に、「angolo」は「カド」・「スミ」・「ハシ」と3種の名詞に、それぞれ関わっている。

第7表

名詞	カド	スミ	フチ	ヘリ	サキ	ハシ
angolo	6	11				2
bordo			3			
bordura				1		
cima						1
coda						1
estremità					1	3
lato						2
lembo			1			1
orlo			1	2		1
punta					5	

第7表から次の点が指摘できよう。

- (1) 最も幅広い対応関係を示している日本語名詞は「ハシ」であって、7種のイタリア語名詞と対応している。
- (2) 最も幅広い対応関係を示しているイタリア語名詞は「angolo」と「orlo」であって、いずれも3種の日本語名詞と対応している。
- (3) いずれも用例数が僅少であるので、断言することは難しいが、「bordo」は「フチ」と、「estremità」は「ハシ」と、「punta」は「サキ」と、それぞれ主として対応しているように思われる。

### §7 イタリア語における「物の周辺・先端部」を指す名詞の意味論的考察

第7表左隅に現われる10種の名詞であるが、これらの中で原義(いわゆる第1義)として物の周辺・先端部を指すものは僅少である。すなわち、ラテン語の *extremitas* 「周辺、フチ、ハシ」に由来する「estremità(周辺、先端部)」と、*pungere* 「刺す」の過去分詞 *punto* 「刺されたもの」の女性形に由来する「punta(とがった部分、先端)」くらいのものである。

「angolo」は幾何学で言う「角(かく)」が原義で、次いで、(部屋などの)「スミ」、「カド」へと意味が拡大した。「bordo」は「(船の)舷側」が原義で、次いで、「フチ」、「ヘリ」、「末端」へと意味が拡大した。「bordura」は元は服飾関係の語彙であつて、「フチ飾り」である。「cima」は「頂、頂点」が原義で、次いで、「ハシ」、「先端」へと意味が拡大した。ラテン語の *cauda* に由来する「coda」は、「尾、尻尾」が原義で、その後、「尾の形をしたもの」から「末端」へと意味が拡大した。ラテン語 *latus* に由来する「lato」は、「側、側面」が原義、その後、「周辺」へと意味が拡大した。「lembo」は「(衣服の)裾」が原義、その後、「ハシ」「ヘリ」へと意味が拡大した。「orlo」も元は服飾関係の語彙であつて、「(裾や袖口の)折りしろ」、「(フリルの)外縁」が原義である。

なお、今回の調査では用例が見つからなかったが、ラテン語の *margo* 「縁取り、境界」に由来する「margine」も、周辺部(「フチ」・「ヘリ」・「ハシ」)を表わす名詞である。

このように、イタリア語の10種の名詞には原義として「物の周辺・先端部」を表わすものは少なく、「幾何学用語」・「船舶用語」・「服飾用語」・「尻尾」・「頂上」などが「物の周辺・先端部」という一般的な意味(すなわち「カド」・「スミ」・「フチ」・「ヘリ」・「サキ」・「ハシ」)へと転用されたものと思われる。

### §8 まとめ

ここまでの主たる結果を列記しておこう。

- (1) 日本語では、「とがって突き出したところ」を外側から見るのが「カド」であり、内側から見るのが「スミ」である。こういった内外の視点にイタリア語は無頓着で、「カド」も

- 「スミ」も「angolo」で対応している。(第2表と§3の解説を参照)
- (2) 最も幅広い対応関係を示している日本語名詞は「ハシ」であって、7種のイタリア語名詞と対応している。すなわち、「angolo」・「cima」・「coda」・「estremità」・「lato」・「lembo」・「orlo」と、それぞれ対応している。(第7表参照)
  - (3) 最も幅広い対応関係を示しているイタリア語名詞は「angolo」と「orlo」であって、いずれも3種の日本語名詞と対応している。すなわち、「angolo」は「カド」・「スミ」・「ハシ」と、「orlo」は「フチ」・「ヘリ」・「ハシ」と、それぞれ対応している。(第7表参照)
  - (4) いずれも用例数が僅少であるので、断言することは難しいが、「bordo」は「フチ」と、「estremità」は「ハシ」と、「punta」は「サキ」と、それぞれ主として対応しているように思われる。(第7表参照)
  - (5) イタリア語の名詞には原義(いわゆる第1義)として「物の周辺・先端部」を表わすものは少なく、「幾何学用語(たとえば「角(かく)」)」・「船舶用語(たとえば「舷側」)」・「服飾用語(たとえば「裾や袖口の折りしろ」)」・「(動物の)尻尾」・「(山の)頂上」などが、一般的な「物の周辺・先端部」という広い意味(すなわち「カド」・「スミ」・「フチ」・「ヘリ」・「サキ」・「ハシ」)へと拡大・転用されたものと思われる。(§7参照)

#### 注

- 1) (國廣 1981) pp.34-35
- 2) 東京イタリア文化会館刊行の『イタリア関係図書目録(Principali pubblicazioni sull'Italia edite in Giappone)』には、現在、1977年～2011年までの業績が掲載されているのであるが、これらの中には、本稿で扱うテーマの論文は見当たらなかった。また、インターネット検索も試みたが、この種の論文は刊行されていないようである。
- 3) (新村 1981) p.850 & p.1756
- 4) (國廣 1984) pp.211-224
- 5) (國廣 1984) pp.213-215
- 6) 昨今「ホームテレビ(チャンネル5)」で、「アタック25」というクイズ番組がある。4名の回答者がクイズに挑戦し、縦横5枠、計25枠を取り合うゲームである。この25枠には4つの「角(コーナー)」が存在するのであるが、これは、野球のスコアボードと同様、「内側から見た角」なので、「スミ」と呼ばねばならないところであるが、歴代の司会者は“カドを取る”“カドが残っている”など、「カド」と呼んでいる。

#### 使用テキストとその略号

- (1) 日本語テキスト (作家の五十音順)
  - 有吉佐和子『華岡青洲の妻』1978年9月、21刷、新潮文庫(略号『華岡青洲の妻』)
  - 川端康成『眠れる美女』1988年6月、36刷、新潮文庫(略号『眠れる美女』)



川端康成『古都』1989年11月、59刷、新潮文庫（略号『古都』）  
夏目漱石『草枕』1991年7月、77刷、岩波文庫（略号『草枕』）  
三島由紀夫『愛の渴き』2006年1月、114刷、新潮文庫（略号『愛の渴き』）  
三島由紀夫『金閣寺』2012年6月、133刷、新潮文庫（略号『金閣寺』）  
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』2013年6月、62刷、新潮文庫（略号『銀河鉄道の夜』）  
吉本ばなな『キッチン』1990年10月、61刷、福武書店（略号『キッチン』）

(2) イタリア語訳（作家のアルファベット順）

Ariyoshi, Sawako : *Kae, o le due rivali*, traduzione di Lydia Origlia, 1986, Milano

Kawabata, Yasunari : *La casa delle belle addormentate*, traduzione dall'originale giapponese di Mario Teti, 1972

Kawabata, Yasunari : *Koto, ovvero i giovani amanti dell'antica città imperiale*, introduzione di Carlo Cassola, traduzione di Mario Teti, 1968, Milano

Mishima, Yukio : *Il padiglione d'oro*, traduzione dal giapponese di Mario Teti, 1962, Milano

Mishima, Yukio : *Sete d'amore*, traduzione dal giapponese di Lydia Origlia, 1988, Ugo Guanda Editore, Parma

Miyazawa, Kenji : *Una notte sul treno della Via Lattea e altri racconti*, a cura di Giorgio Amitrano, 1994, Marsilio Editori, Venezia

Natsume Soseki : *Guanciaie d'erba*, traduzione di Lydia Origlia, 1983, Editoriale Nuova

Yoshimoto, Banana : *Kitchen*, traduzione dal giapponese di Giorgio Amitrano, Giangiacomo Feltrinelli Editore, Milano

参考文献

(國廣 1981) : 國廣哲彌編『日英語比較講座』第3巻「意味と語彙」1981、大修館

(國廣 1984) : 國廣哲彌・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子共著『ことばの意味3…辞書に書いてないこと…』1984、平凡社選書73

(新村 1981) : 新村出編『広辞苑』第二版補訂版、1981年10月、岩波書店

(金田一 1982) : 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎共編『新選国語辞典』1982年3月、小学館